

労働力

2023. 3. 1

先日、近所のラーメン屋さんに行った。この店に行くのは久しぶりである。いつでも行けると思っていると、意外と行かないものである。駐車場に入る。車をどこに置くのか考える。1月中旬から車が新しくなった。今まで乗っていた車のとき以上に、駐車をする場所にも気を使う。

慎重に車を止め、鍵をかけ、お店の入口へと向かう。すると、店から出てきたばかりの女性二人組から「ライトがついてますよ」と声をかけられる。確かに私の車のライトはついている。「もうすぐ消えます。ありがとうございます」と返した。今度の車は、そういう車なのである。親切心から言っていたのだが、こういうことが起こるのかと学習した。

お店に入る。以前と変わらない。席に着く。メニューも変わらない。しばらくして、この店の変化に気づいた。従業員4名のうち、外国人が3名だった。日本人はいないのかと思ったら、いかにもアルバイトの雰囲気を漂わせている女性が1人だけだった。

厨房では、外国人の男性が二人でラーメンをつくっている。注文を聞きにきてくれたのは、外国人の女性だった。ちゃんとオーダーが伝わるかどうか不安になる。安全策をとり、注文のメニューを言うだけでなく、これですと指をさした。だが、取り越し苦労だった。何の問題もなく、私の注文は厨房に伝わっていった。

この店は、いつからこういったスタッフになったのだろうか。1日を通してこうなのだろうか。店を閉めて売上などを計算するのも外国の方なのだろうか。店の切り盛りを外国の方に任せているのだろうか。次から次へと疑問がわいてきた。

東京などの首都圏や仙台などに行くと、コンビニエンスストアの従業員は外国人が多い。こちらが慣れていないだけなのであろう。これからどんどん外国の方が日本で働くようになると言われ、頭ではわかってはいる。だが、まだまだ自分の中で馴染んではない。何事も慣れの問題なのだろうか。

逆の立場になって考えてみた。自分がもし外国に住み、働くようになったとする。言葉の問題をクリアしながら必死に働くだらう。そんな日本人である私を現地の人たちはどう見るのだろうか。どう見えるのだろうか。

4人のうち3人が外国人であることに驚いたのは事実である。観察しながら、さらに思ったのは、外国人の方が、すっかりお店に馴染んでいることである。違和感がない。溶け込んでいる。ということは、この方たちは、このお店にとって、かけがえのない労働力となっているということである。そして、それぞれの人生を生きているということである。その舞台が日本であり、このお店ということである。

このお店のラーメンを久しぶりに食べた。味が変わっていなかったことに安心し、満足して車へと向かった。